

途上国アルバム：東アフリカのバナナ・テキスタイルの開発に向けて

萩原孝一
一般社団法人アフリカ協会特別研究員

多摩美術大学は、熱帯・亜熱帯地域で大量に廃棄されているバナナの茎の有効活用を目指し、茎に含まれるファイバーで織布を生産するシステムの構築を推進している。2000年には学内に「バナナ・テキスタイル・プロジェクト」を発足。2007年にウガンダの産業担当国務大臣が大学を訪問し、その技術を激賞。ヴィクトリア湖畔の東アフリカ共同体（ケニア、タンザニア、ウガンダ、ルワンダ、ブルンジ）だけで世界のバナナの17%を産出しており、そこに眠っているバナナファイバーの総量は優に100万トンを超えると言われている。この貴重な資源を有効活用することにより、農村開発、女性起業家育成、貧困対策などに新たなアプローチを構築、展開できる可能性がある。昨今巷で話題となっているBOPビジネスに繋がる可能性も大いに秘めている。

2008年のアフリカ開発会議（TICAD IV）では、ケニア、タンザニア、ウガンダ、ルワンダの各大統領にバナナファイバー製の陣羽織を贈呈することが出来た。これを契機として、ウガンダ、ルワンダ両国大統領から正式な招聘状が寄せられ、TICAD IVから5か月後の2008年10月両国を訪問することとなった。



ケニア大統領



タンザニア大統領



ウガンダ大統領



ルワンダ大統領

チームは多摩美大の学生4名、教授3名、紡績専門家1名、UNIDO東京事務所から2名、計10名の編成であった。両国では学生作品のプレゼンテーションを中心としたセミナーとワークショップを実施した。現地側からは、政府関係、大学関係、各種研究機関、繊維関係、学生、NPO、マスコミ関係から多くの参加者があり、その熱心さに圧倒された。セミナーではプロジェクトの概要と大学教育、日本の染色文化から得られた知見、制作活動、紡績、不織布などの技術開発と今後の産業化への可能性についてレクチャーが行われた。新鮮でユニークな発想に社会性や時代性を上手くブレンドして学生たちが制作した作品が分かりやすく説明されバナナ布の可能性をアピールした。なかでも、今回のアフリカ訪問のために制作された「風呂敷シリーズ」はそのデザインコンセプトに、日本とアフリカの国際的、学術的、技術的、文化交流の懸け橋になるもの、という学生の強い思いが込められていた。学生たちは文化や民族、言葉の国境を越えて見事にその思いをアフリカの人々に伝え、拍手喝さいを浴びた。ワークショップでは廃棄されたバナナの茎からの繊維抽出、糸作りを紹介し、不織布によるバッグの制作と手織りマットの制作を行った。出来上がった作品はどれも個性的で美しく、アフリカの「バナナ布」の誕生が近い将来可能であることを予感させた。



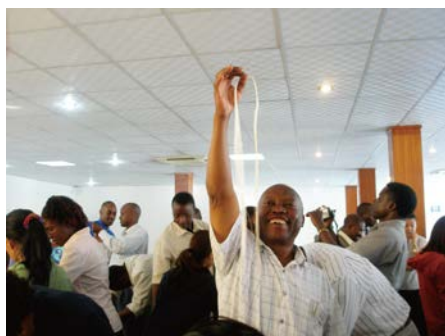
バナナプランテーション



バナナ売り



田舎の子供たち



ワークショップ



ウガンダでは図らずも滞在最終日にムセベニ大統領に拝謁し、チームの活動を紹介することができた。しかも、その日大統領は首都カンパラから数百キロ離れた遊説先に滞在していたため何と軍用ヘリコプターにての送り迎えとなったのである。今回が生まれて初めての海外渡航となった学生もあり、チームのメンバーにとっては得難い経験となった。

この拝謁のお蔭もあってか、ついに JICA が名乗りを上げてくれることになり、その後、いくつかのグループ研修が多摩美大を中心として実施されている。近い将来、ウガンダやルワンダ国内にバナナ・テキスタイル研究所が設立され、日本から更なる協力を得て機材供与、専門家や青年海外協力隊の派遣スキームに続くことが期待される。そして、いつの日にかアフリカ人によるバナナ・テキスタイル作品が市場に耐える商品として世の中に出回ることを心待ちにしたい。そこに至ることは平坦な道程ではないが、今までの一連の動きがその突破口となっていることは間違いない。



ウガンダ大統領軍用ヘリにてお出迎え



大統領に拝謁



大統領の別邸にて